

<特別企画のご案内>

諸事情により変更が生じることがございます。最新情報はホームページでご確認ください。

<p>特別企画 1</p>	<p>テーマ：化学物質、廃棄物及び汚染に関する政府間科学・政策パネル（ISP-CWP）の設立と今後について</p> <p>Theme: Establishment and prospects of the Intergovernmental Science-Policy Panel on Chemicals, Waste and Pollution (ISP-CWP)</p> <p>主催：環境省</p> <p>日時：7月15日（火）9:30-11:30</p> <p>会場：A会場</p> <p>概要：2025年6月に開催された国連の政府間会合で、「化学物質、廃棄物及び汚染に関する政府間科学・政策パネル（ISP-CWP：Intergovernmental Science-policy Panel on Chemicals, Waste and Pollution）」が設立された。これは、気候変動分野でのIPCC（気候変動に関する政府間パネル）、生物多様性分野でのIPBES（生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム）に類する新たな独立科学政策パネルであり、当該分野に関する最新の科学的・技術的アセスメントの作成・発信等を通して、政策立案に関連する科学的基礎を提供するための国際的な組織と解される。</p> <p>本企画では、はじめに環境省がISP-CWPの運用枠組みを概説する。その後、既存の科学政策パネルにおけるアセスメントの執筆や組織運営に携わった経験がある国内の有識者から、各パネルにおける経験や事例を紹介いただくとともに、化学物質・廃棄物との関連が深い学会の代表者から、ISP-CWPが今後取り組むべき課題や、科学者としてのパネルへの期待及び国内外でパネルを推進し、さらに国内の科学者がパネルに積極的に関与するための具体的な方策等について講演・議論いただく。</p> <p>プログラム：(敬略)</p> <p>09:30- 開会挨拶 塚田 源一郎（環境省 環境保健部 化学物質安全課長）</p> <p>09:30-09:45「化学物質、廃棄物及び汚染に関する政府間科学・政策パネル（ISP-CWP）についての議論の経緯と概要」 高木 恒輝（環境省 環境保健部 水銀・化学物質国際室長）</p> <p>09:45-09:55「IPCCとインベントリータスクフォース（TFI）の概要と経験」 榎 剛史（地球環境戦略研究機関・TFI共同議長）</p> <p>09:55-10:05「IPBESと学際的専門家パネル（MEP）の概要と経験」 橋本 禅（東京大学・MEP共同議長）</p> <p>10:05-10:20「ISP-CWPが取り組むべき課題、学術界に求められる知見と役割及び学術界の連携の在り方」 鈴木 規之（国立環境研究所・日本環境化学会 会長）</p> <p>10:20-10:30「ISP-CWPが取り組むべき課題、学術界に求められる知見と役割及び学術界の連携の在り方」 宇野 誠一（鹿児島大学・日本環境毒性学会 会長）</p> <p>10:30-10:40「ISP-CWPが取り組むべき課題、学術界に求められる知見と役割及び学術界の連携の在り方」 東 賢一（近畿大学・日本衛生学会 副理事長）</p> <p>10:40-11:30 パネルディスカッション（テーマは仮）※2 ▶ISP-CWPが取り組むべきと考えられる既存の課題又は潜在的な課題、必要な科学的知見、ISP-CWPで対応するための取組や連携基盤 ▶一般市民や市民社会に対するコミュニケーションやアウトリーチの</p>
---------------	--

	<p>在り方と役割分担</p> <p>亀屋 隆志（横浜国立大学・日本水環境学会 副会長） 鯉淵 典之（太田医療技術専門学校・日本内分泌攪乱物質学会 会長） 小椋 康光（千葉大学・日本薬学会 環境衛生部会 部会長） 高岡 昌輝（京都大学・廃棄物資源循環学会 会長） 中井 里史（横浜国立大学・大気環境学会 会長） 中村 桂子（東京科学大学・日本学術会議 環境学委員会・健康・生活科学委員会 合同環境リスク分科会 委員長） 広瀬明彦（化学物質評価研究機構 安全性評価技術研究所）</p> <p>※1：登壇者の肩書は 2025 年 5 月時点のものです。最新の役職とは異なる場合があります。 ※2：司会進行は(株)エックス都市研究所が務めます。</p>
<p>特別企画 2</p>	<p>テーマ：シグナル毒性と神経攪乱の評価に向けた革新技術</p> <p>Theme: Current Status and Challenges in Signal Toxicity Assessment</p> <p>共催：日本神経化学会</p> <p>日時：7 月 15 日（火）13:00-16:15</p> <p>会場：A 会場</p> <p>概要：神経毒性化学物質による毒性の中には、受容体を介したシグナルの攪乱を通じて脳の神経ネットワークが影響を受け、高次脳機能障害や情動・認知の変容を引き起こす可能性が指摘されています。しかし、現行の毒性試験では、これらの影響を十分に評価できていない点が課題となっています。本特別企画では、日本神経化学会との共催のもと、神経ネットワーク攪乱に関する革新的な検出技術とその応用例を中心に議論を深め、脳機能ネットワーク攪乱を評価する新しい試験法の構築に向けた知見を共有する場を提供します。</p> <p>プログラム：（座長：池中良徳 田中謙二）</p> <p>イントロ：シグナル毒性評価の現状と課題：演者紹介（北海道大学・池中良徳）5 分</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 化学物質が高次脳機能に及ぼす未知の影響とシグナル毒性評価に向けた新展開（富山大学・平野哲史）20 分 2. 脳内環境をモニターするグリアとその破綻を検出する MRI 技術（慶応義塾大学・田中謙二）25 分 3. ナノスケールから神経攪乱の本質にせまる新しい電子顕微鏡技術（自治医科大学・大野伸彦）25 分 4. In vivo イメージングで探る発達神経毒性評価～マウス甲状腺機能低下モデルによる検証～（岐阜薬科大学・中西剛）25 分 <p>休憩：10 分</p> <ol style="list-style-type: none"> 5. 鯨類 iPS 細胞の樹立と環境汚染物質の神経毒性リスク評価への応用（麻布大学・落合真理）20 分 6. ナノスケールの微小な粒子が脳に及ぼす影響：粒子誘導異常構造タンパク質への注目（山口東京理科大学・小野田淳人）20 分 7. 質量分析計を用いた神経毒性の検出と新規バイオマーカーの開発に向けた挑戦（北海道大学・池中良徳）20 分 <p>総合討論・総括：田中謙二・池中良徳 10 分</p>
<p>特別企画 3</p>	<p>テーマ：室内環境における環境汚染問題を多角的に考える</p> <p>Theme: Exploring Environmental Pollution Issues in Indoor Environments from Multiple Perspectives</p> <p>共催：室内環境学会</p> <p>日時：7 月 15 日（火）14:45-16:15</p>

	<p>会場：C 会場</p> <p>概要：人はその生活の大部分を室内で過ごしており、室内環境の問題は人の健康を守るだけでなく、快適な暮らしの観点からも極めて重要な課題となっています。しかし、室内環境は多くの構成要素から成り立っているため、これまで我が国ではそれぞれの要素ごとに個別の学会等で研究が進められてきました。そこで、今回の特別企画では化学物質、におい、シックハウス、ウイルスや微生物など、室内環境に存在するさまざまな問題について、最新の知見や研究動向を紹介し、あわせて、私たちが健康で快適に過ごせる室内環境をどのように維持・構築していくべきかについて、多角的な視点から議論を深めます。</p> <p>プログラム：(座長：水川葉月 (愛媛大学)、小栗朋子 (産業技術総合研究所)、高木麻衣 (国立環境研究所))</p> <p>14:45-14:50 趣旨説明 水川葉月 (愛媛大学)</p> <p>14:50-15:15 「室内環境学会の活動と室内環境汚染問題の解決に向けて」 東 賢一 (近畿大学)</p> <p>15:15-15:35 「残留性化学物質曝露と室内環境：PFAS を例として」 藤井 由希子 (第一薬科大学)</p> <p>15:35-15:55 「アレルギーやシックハウス症候群と関連する自宅の室内環境：ダンプネス・気密性・化学物質」 池田 敦子 (北海道大学)</p> <p>15:55-16:15 「室内環境における呼吸器系ウイルス対策の課題」 嶋崎 典子 (国立健康危機管理研究機構)</p>
<p>特別企画 4</p>	<p>テーマ：ハイブリッド環境質量分析</p> <p>Theme: Hybrid Environmental Mass Spectrometry</p> <p>共催：日本質量分析学会</p> <p>日時：7月16日(水) 9:30-11:30</p> <p>会場：A 会場</p> <p>概要：日本環境化学会と日本質量分析学会の合同企画として、目覚ましい進歩を遂げている質量分析技術を応用した環境化学研究の将来展望に関するセッションを開催する。本年度は「ハイブリッド環境質量分析」と題し、様々な要素技術を複合した新しい分析技術に着目したセッションを開催する。質量分析の意味を広義に捉え、萌芽的成果を含めた研究を紹介することで、新規的・創発的な環境化学研究の議論の場を提供したい。</p> <p>プログラム：(座長：平田岳史 板井啓明)</p> <p>08:25-09:30 主旨説明 (板井啓明)</p> <p>09:30-10:00 「医療排水による河川汚染の現状」 志村まり (理化学研究所・放射光科学研究センター)</p> <p>10:00-10:20 「環境中のナノ粒子動態解明に向けた高速質量分析法の開発」 栗原かのこ (東京大学大学院)</p> <p>10:20-10:40 「ICP 質量分析と深層学習を融合した大気・海洋における生物利用可能鉄の供給源解析 (仮題)」 坂田昂平 (東京大学大学院)</p> <p>10:40-11:00 「ハイブリッド質量イメージング手法の開発」 平田岳史 (東京大学大学院)</p> <p>11:00-11:20 「ソースを反映しない安定同位体比と環境化学の接点～ケイ素の事例～」 板井啓明 (東京大学大学院)</p> <p>11:20-11:30 総括「還元主義の崩壊と次世代の環境化学構築に向けて」 平田岳史・板井啓明</p>

<p>特別企画 5</p>	<p>テーマ：大気中揮発性有機化合物（VOC）の環境動態～VOC 研究から大気環境問題を横断的に探る～</p> <p>Theme: Environmental Dynamics of Volatile Organic Compounds (VOCs) in the Atmosphere - Cross-sectional study of air quality issues from VOC research</p> <p>共催：大気環境学会</p> <p>日時：7月17日（木）9:30-11:30</p> <p>会場：A 会場</p> <p>概要：大気に関わる環境問題は大気中有害化学物質による健康リスクの他、地球温暖化やオゾン・PM2.5等の二次生成物質による大気汚染など多岐にわたっています。それらの問題に対して、大気中の揮発性有機化合物（VOC）は共通する原因物質の一つとなっています。本セッションでは大気中 VOC の最新の研究成果を紹介し、その環境影響について多角的に議論する場を提供していきます。また、本企画は大気環境学会と共同で開催することにより、日本環境化学会が培ってきた化学物質の分析・観測技術と大気環境学会が得意とする物質の環境動態・モデルシミュレーションを融合した新たな研究展開への発展も議論していきたいと思ひます。</p> <p>プログラム：（座長：米持真一（埼玉県環境科学国際センター）、星 純也（東京都環境科学研究所）</p> <p>09:30-10:00：都市森林・熱帯・自由対流圏における人為・自然起源揮発性有機化合物の動態とその大気環境影響 大河内 博（早稲田大学）</p> <p>10:00-10:30：地球温暖化物質ハイドロフルオロカーボンの測定法開発と大気観測 市川有二郎（埼玉県環境科学国際センター）</p> <p>10:30-11:00：大気中酸化エチレンの現状と今後の研究展望 齊藤伸治（東京都環境科学研究所）</p> <p>11:00-11:30：領域化学輸送モデルによる大気中 VOC 濃度予測 茶谷 聡（国立環境研究所）</p>
<p>特別企画 6</p>	<p>テーマ：日韓共催シンポジウム：韓国環境分析学会と日本環境化学会の連携強化のための共催シンポジウム</p> <p>Theme: Japan-Korea Joint Symposium: Joint Symposium for Strengthening Cooperation between the Korean Society for Environmental Analysis and the Japan Society for Environmental Chemistry</p> <p>共催：韓国環境分析学会(The Korean Society for Environmental Analysis, KSEA)</p> <p>日時：7月17日（木）13:00-14:30</p> <p>会場：A 会場</p> <p>概要：日本と韓国の環境化学分野の研究発表や相互交流と情報共有により、両国の学術的な進展を図り、東アジア地域での連携をより強化することを目的として企画した。過去に韓国環境分析学会（KSEA）とは2回の合同のシンポジウムを開催している。2009年第18回環境化学討論会（つくば）で同時開催した第1回日韓環境化学シンポジウムでは、両会長が共同研究や相互交流の文書に調印をし、韓国から80名が参加した。第2回日韓環境化学シンポジウムは2010年にソウルの淑明女子大学（Sookmyung Women's Univ.）で開催（KSEA 秋季大会と同時開催）、日本環境化学会から82名が参加した。その後しばらく共催イベントは開催されていなかったが、個別に研究機関や研究者間では交流を継続していた。昨年2024年7月の広島で開催された第3回環境化学物質合同大会（第32回環境化学討論会）では、国際セッションの枠内で韓国から3名の研究者を招聘した。また11月にはKSEAの秋の年会在済州島で開催され、国</p>

	<p>際セッションに日本環境化学会員 3 名が参加した。今後も継続して相互交流を図り、特に中堅若手の連携強化を推進する。</p> <p>プログラム：(Chairman:Yuichi MIYAKE (Yokohama National Univ.), Hidenori MATSUKAMI (NIES))</p> <p>13:00-13:02 History and outline of Japan-Korea Joint Symposium 日韓共催シンポジウムの歴史と概要 Dr. Prof. Takumi TAKASUGA (vice chairman of JEC, Shimadzu Techno-Research, Ehime Univ.)</p> <p>13:02-13:15 The status of newly added POPs, medium-chain chlorinated paraffins (MCCPs), in Japan: Their presence in products and proper disposal Dr. Natsuko KAJIWARA (NIES, Japan)</p> <p>13:15-13:30 Target, suspect, and non-target analyses of novel and neutral PFASs surrounding fluorochemical industries: A call for action on atmospheric emissions Dr. Prof. Moon Hyo-Bang, Hanyang University, Korea</p> <p>13:30-13:45 Above-ground translocation mechanisms of PFAS in plants Dr. Prof. Hideyuki INUI (Kobe Univ. Japan)</p> <p>13:45-14:00 Omics-based study on disease early indication in edible seaweed <i>Pyropia yezoensis</i> Dr. Prof. Jeong Tae-Yong, Hankuk University of Foreign Studies, Korea</p> <p>14:00-14:15 Assessment of Environmental Forensic Indicators for Anthropogenic Groundwater Contamination via Target/Suspect/Nontarget Analysis Using HRMS Dr. Prof. Oh Jeong Eun, Pusan National University, Korea</p> <p>14:15-14:29 A pre-oxidation approach using LC-MS/MS to determine the total microcystins (MCs) in surface water Dr. Choi Jaewon, K WATER, Korea</p> <p>14:29-14:30 Future Perspectives for Japan-Korea Joint Symposiums Dr. Choi Jaewon (chairman of KSEA, K WATER, Korea)</p>
<p>特別企画 7</p>	<p>テーマ：化学物質と共生する社会を目指して：健康と環境を衛る科学の役割 Theme: Toward a society coexisting with chemicals: The role of science in health and the environment</p> <p>共催：日本薬学会環境・衛生部会 日時：7月17日(木) 14:45-16:15 会場：A会場</p> <p>概要：私たちの生活を支える化学物質は、その恩恵とともに健康や環境へのリスクも内包しています。これらのリスクを正しく評価し、安全に利用するためには、化学物質の有害性を正確に理解した上で生体や環境に与える影響を予測し、的確なリスクアセスメント手法を確立することが必要です。本特別企画では、化学物質の健康影響について、毒性発現メカニズム研究や体内動態予測研究を基盤として毒性評価・予測系の構築を指向した取り組みを紹介し、さらに化学物質と共生する社会を築くための科学的知見と未来への展望について議論します。</p> <p>プログラム：(座長 木村朋紀、中尾晃幸 (摂南大学)) 14:45-15:03 「環境化学物質のマウス肝薬物代謝酵素誘導能を指標とした毒性評価」 中尾晃幸 (摂南大学)</p>

	<p>15:03-15:21 「ヒト肝細胞キメラマウスを用いた in vitro・in vivo からの化学物質の体内動態・肝毒性予測評価とその展望」 佐能正剛 (和歌山県立医科大学)</p> <p>15:21-15:39 「ヒト胎盤由来栄養膜幹細胞と絨毛外性栄養膜細胞株を用いた胎盤毒性評価」 木村朋紀 (摂南大学)</p> <p>15:39-15:57 「胎仔パラメータを用いたアンドロゲン作用評価系の構築」 松丸大輔 (岐阜薬科大学)</p> <p>15:57-16:15 「ゼブラフィッシュ胚を用いた発生毒性評価と毒性発現機序解明」 久保田 彰 (帯広畜産大学)</p>
<p>特別企画 8</p>	<p>テーマ：環境化学物質のリスク学・環境毒性学とネイチャーポジティブ・TNFD との節合点</p> <p>Theme: Interface of Environmental Toxicology and Risk Science with the Nature Positive and TNFD Framework</p> <p>共催：日本リスク学会</p> <p>日時：7月18日(金) 9:30-11:00</p> <p>会場：C会場</p> <p>概要：2022年昆明・モンリオール生物多様性枠組が採択され、「生物多様性の損失を食い止め、回復軌道に乗せる」こと(ネイチャーポジティブ)が2030年までの世界目標として位置づけられた。その目標達成のために、企業や金融機関はTNFD(自然関連財務情報開示タスクフォース)に対応し、自然資本や生物多様性への影響について情報を開示するよう求められている。また、政府や自治体等もネイチャーポジティブの実現に向けた責務を共有している。本特別企画では、ネイチャーポジティブ・TNFDについて、特に化学物質の環境毒性・リスクという観点から、現状を整理し、これまでの取り組みや今後の必要となる取り組みについて情報共有し、議論したい。</p> <p>プログラム：(座長：平井 祐介(製品評価技術基盤機構)、高橋 宏和(株式会社 資生堂))</p> <p>09:30-09:50 「ネイチャーポジティブが求められている背景とTNFDの概要」 鬼頭健介(みずほリサーチ & テクノロジーズ)・井上知也(みずほリサーチ & テクノロジーズ)</p> <p>09:50-10:10 「国際的な財務報告フレームワークからTNFDの挑戦と課題」 上野雄史(静岡県立大学)</p> <p>10:10-10:25 「企業におけるTNFD・ネイチャーポジティブの推進と課題」 高橋宏和(株式会社資生堂)</p> <p>10:25-10:40 「環境毒性学がどう貢献できるか？」 岩崎雄一(産業技術総合研究所)</p> <p>10:40-10:55 「TNFDの推進によってネイチャーポジティブは達成できるか？」 永井孝志(農業・食品産業技術総合研究機構)</p> <p>10:55-11:00 総合討論(5分)</p>